
疑惑の旋律

Knight bugs

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

疑惑の旋律

【Nコード】

N5004X

【作者名】

Knight bugs

【あらすじ】

嵐の夜に、10の少女がかけた一本の電話。事件は全てそこから始まった。警察は、少女を事件の重要参考人として任意で取り調べ始める。

警察は犯人の目星も付けられず、そんな時に2人目の被害者が出た。次々と起こる殺人事件に翻弄される刑事達。彼らの焦りの色が出て来る。恋愛模様。

犯人は誰か？ そして犯人の目的は？

登場人物の紹介（前書き）

初めて推理物を書いています。

登場人物の紹介

登場人物

小田切 (秋山) 美空

10歳の少女。友人は、古道具屋で譲ってもらったバルト(バイオリン)と 学校で隣の席になったバイオレット。真夏でも長袖のセーターやトレーナーを着ている。本人は、冷房が苦手だからと言っているが……。

秋山 みどり

美空の母親。プロのバイオリニストとして活躍していた。2年前に突然クラシック界から姿を消す。夫の彰人とは二年前に離婚した。今は、美空を引き取り親子2人暮らし。

小田切 彰人

ユダヤ系のオーストリア人の母と日本人の父の間に生まれた。若い頃はセントラルフィルハ・モニで、指揮者として活躍していた。父親の死後、ホテル業を継ぐ。妻との価値観の違いで離婚した。今は、テレジアと交際中。

テレジア・アッシュェリ・フォング・オスカー

オーストリア出身のソプラノ歌手。みそらにとって唯一心を許せる大人の女性。美空を連れて色々なコンサートに連れて行く。

チエース・モールドルフ 40歳

ドイツ系のイタリア人。みどりの専属マネージャー。

美空に対して、女を見るような嫌らしい目で見るようになる。

ジャン ム ジャックムキーマン 38歳

パリ市内のベテラン刑事。女1人男3人（8、6、4歳）の5人家族。妻とは死別。

セーラムキーマン

ジャックの妻。4年前に3男を産んだ後、自宅にあるグリーンハウスにて、頭上からグリーンハウスの硝子の屋根が落ちて来て、死亡。警察は事故死として判断。

バイオレットムマックレイン

みそらの親友。10才 しっかり者。セーラの連れ子。頭痛持ちで、クリニックに通院している。

ジューディームウォルカー 23歳

赤毛にそばかすがある。愛嬌たっぷり警官。人当たりが良い。今までは、ど田舎の管轄だったが、今年の春から憧れの都、パリ勤務になった。少々天然だが、クラッシュには目がない。マカロンやクレープなどの甘い物に目がない。目下 只今、ダイエット中の刑事。階級は、警部補。

ルーカスムホワイト

黙っていけばイケメンと言われている。口の悪さは署内で1位。美空を犯人だと決めつけている。警視總監の息子。エリート街道真つしぐらで、階級は、警部補。

マディソンムジュリアムハンター

通称MJ パリの警察署長。偶に現場である殺人課に顔を出して、

ジャンニジャックやジョディー達に発破をかけている。ジョディー
やジャックの上司にあたる。女性にしては、身長は高く、180あ
る。愛用の香水はヴァイスヴァーサを使用している。

第1小節

「もしもし 警察ですか？」

「はい。フランス警察パリ支部ですが、どうかされましたか？」

「・・・ええ。 人が死んで居るんです」

「分かりました。直ぐに捜査員をそちらに派遣します。貴方のお名前と住所をお願いします。それと、大人の方に電話を代わっていただけですか？」

「・・・無理です」

「無理って、お前、ガキのくせに何言ってるんだよ！警察をおちよくるのは、止めなよ！ こっちは、子供相談室じゃないっつーの！」

その言葉を言った署員は、電話をかけて来た子供が切るだろうと高をくくっていた。だが、相手は電話を切る事もせず、ただ大人は出せないとだけ繰り返している。

「落ち着きなさい。無理だと言っているの」

「ーちよっと、あんた！ーーー」

たまたまこの電話に対応していたのは、ルーカスだった。乱暴にうねった自慢のブロンドの髪を左手で掻き筆ると、ヘイゾ色の瞳には好い加減にしてくれよと言うような疲労の色が出ていた。彼は、この春めでたく、自分の地元である此処パリ支部に配置された刑事だ

った。昨夜からの張り込みでダビデ像の様な精悍な顔立ちも、目の下にクマを色濃く作っていれば、色男も台無しである。

「どうしたの？ 何か荒れているわね」

MJの言葉に、ルーカスは、受話器を押さえると、「ガキの悪戯ですよ」そう言うと、横から褐色の細い手が、スッと出て来て 電話機のスピーカーのボタンを押した。

「あ……」

(静かにしなさい)

ルーカスは、驚いた顔で自分の横に立っている人を見つめた。彼女は、自分の口元に人差し指を当てて、静かにするようにとルーカスに言っていた。

「貸しなさい。ルーカス もしもし？ お電話変わりました。直ぐに刑事をそちらに向かわせますが、因みに死んで居るのはあなたの家族なの？」

『あなたは？』

「パリ警察署長のMJよ。死んで居るのは……」

『私を産んだ人よ』

「お母さんなのね」

『そつとも言えるわね』

MJは、メモ用紙に《ジャンニジャックに現場に行くように伝えなさい》と殴り書きをすると、ルーカスにメモを渡した。

「住所とそれからあなたの名前、年齢も教えてくれるかしら？」

『クスツ・・・いいわよ。住所はーーーーー』

ルーカスは、メモに住所を書き込むと、ため息をついた。

電話を切ったMJは、ルーカスの肩をポンと叩くにつこり微笑んだ。

うな垂れる様にMJのオフィスに行ったルーカスは、用意された椅子にどかっと座った。

「どう？ 現場の雰囲気には、もう慣れたのかしら？」

「ああ。何とかね」

「あら、随分弱気な発言ね。このフランスの警視總監の坊ちゃんともあろう方の言葉とは思えないわね。親父に認められるように、実力の上に這い上がってやる！なんてほざいて居たのは、何処のどなただったのかしらね？」

ルーカスは、痛い所を突かれた様に、片目を軽く瞑ると、両手を少しあげて降参のポーズをした。

「あの頃は、まだケツの青いガキだったんだよ」

MJは、デスクの引き出しからタバコを取り出すと、いる？とルーカスに聞いた。彼は、首を横に振ると、MJはタバコを口に啜え、

ライターで火を付けると、深く息を吸い込んだ。眉を潜めながら、吸って居たタバコを灰皿の上で揉み消すと、口から白い煙が龍の様に天井に向かって登って行った。

「ルーカス。今回は、ジャン・ジャックと組んで頂戴。あんたは、ジューデーの下と言う事で、三人で現場に向かってもらっわ。いいわね」

「へーい。って言うか、それって もう決定事項なんですよ？」

「そうよ」

椅子から立ち上がったルーカスは、MJのオフィスを出ると自分の課に戻って来ると、ジューデーに腕を引っ張られる様にして、署から出されると既に運転席に乗って居たジャン・ジャックは、濃い目のサングラスをかけると、早く乗れと言わんばかりに、親指でクイと後部座席を差した。

ため息をつきながらも、先輩刑事にそう言われれば、従うしかないとばかりに、大人しく後部座席に乗り込んだルーカスは、怪しい空模様を見ていた。

「んー？どうした？　もしかして、今夜デートとか言うんじゃないだろうな」

「いえ。別に」

むすつとした顔でメモ用紙に書きこんだ住所を読み上げると、被害者の名前を見て思わずポロつと言った。

「う・・・うっそだろ?!」

ルーカスが変な声を挙げたものだから、ジュディーはホットチョコ
レート吹き出し、ジャン＝ジャックは急ブレーキを踏んだ。

「オイ！ ルーカス 何だよ一体！」

口をパクパクさせて、メモ用紙を差しして居るルーカスの手から、素
早くメモ用紙を奪ったジュディーは、害者の名前を見て思わず「エ
！！！」などと大声で叫んでいた。

道を行きかうおばさん達の白い冷たい視線に、手で口を塞ぎながら
も、ホットチョコレートを零さなかった自分に褒めてやりたいとジュ
ディーは、思った。

「おい。んな事で、自分を褒めんよな！ ったくこれから、現場
に行くって時に何を考えてんだか……って、この辺みたいだ
な。しっかし、でっかい家だな」

「此処は、アパルトマンですよ。しかも、あのホテル王の小田切氏
所有の物ですよ。ジャン＝ジャック」

フンと鼻で返事をしたジャン＝ジャックは、門の近くにあるインタ
ーホンを鳴らした。

『どなたですか？』

「警察です」

そう言うと、大きな鉄格子の様な門が自動で横にスライドすると、
車は中へと進んだ。

この家の敷地内に、なんでこんなに大きな森が存在するんだ？

怪しかった空模様は、次第に生温い風を暗雲とともに、雨雲までも
運んで来た。

「嵐が来そうだな」

ジユディーの赤毛は、より一層キツイウエーブになって来た。それを見たルーカスは、チツと舌打ちをすると何処かに電話をかけていた。

「……ごめん、今夜はダメだ。スマン事件なんだ

どうやら、今夜のデートの相手だったらしいな。怒って相手は切っちゃまったようだがな。仕方ねーお坊ちゃんだな全く……。

ジャンニジャックは、横目でルーカスの事を観察する様に見ていた。《ガチャリ》と頑丈そうな扉の鍵が、開けられる音が聞こえると、ギギギーと重苦しく開く扉の音と共に、自分の息子と同じくらいの少女が、立っていた。

「お入りください」

鈴を転がした様な声で、俺たちをこの豪邸へと招き入れた。

中に入った俺達は、扉を閉めると大きなエントランスの床には大理石が、使われていた。しかも滑らない様にと言うことで、特殊加工も施されて居る。天井を見れば、おおきなシャンデリアが、ぶら下がっていた。

「此処には、執事や、メイドさん達は居ないのかい？」

ジャンニジャックのさり気ない言葉掛けに、少女は肩をピクリとさせる頭を振った。

「ここは、普段でしたら、8人の学生さん達が住んでいらっしやるの。だけど、皆さん長い夏休みを自分の国で過ごされるとかで、家に帰られたんです。今は、私と秋山 みどりの二人で住んでいます。週に二回は、清掃会社の人達が来て、庭の手入れもしてくれるんで

す」

ジャン＝ジャックは、少女の前に跪くと、にっこり微笑んだ。

「私の名はジャン＝ジャック。通称JJ。こちらは、私の部下のジユディー＝ウォルカー、それからシャンデリアの下で、携帯電話を弄って居るのが、ルーカス＝ホワイトだ」

少女は、膝を軽く折って、レディの挨拶をした。美空と名乗った少女は、10歳だと言って来た。

少女の流れる様な黒髪に、黒眼が白い象牙の様な肌を一層綺麗に怪しく見せた。前髪を眉の所で一直線に揃えられている。何だかウチの子供達が見ていた日本のアニメにソックリだな・・・そう感じていたJJは、美空の季節外れの冬服に気が付くと、眉をひそめた。

「お目にかかれて光栄ですわ。警部。私の名は、小田切 美空 10歳、血液型は」 「別に見合いするわけでもないから、いいよ別に、現場は何処？」

白い手袋を嵌めながら、ルーカスは首を左右に捻ると、ゴキゴキと骨を鳴らした。

「ルーカス！！！！」

美空は、目をパチクリさせながら、口角をほんの少しだけ上げた。傍目には、無表情にしか見えないのだが、JJには、その美空の表情が気になっていた。

「あなたが、電話に出た人ね・・・こちらです」

大きな階段がエントランスから続く壁伝いに、左右対象に二つあった。階段を登ると、二階にある秋山の部屋のドアを開けた。ドアを開けて直ぐの所に黒い物が、床の上にあるのが目に入った。それは、床の上につつ伏せになって横たわる、秋山みどりの死体だった。

美空は、泣くことも喚く事もせず、ただ冷静に自分が見たことをJJ達に話して聞かせた。

「被害者の秋山みどりは、2年前までヨーロッパを舞台に活躍していたバイオリニストですよ。確か、引退した年に、夫である小田切氏と離婚されてますがね。誰かに恨まれていたとか、知ってますか？」

横たわるみどりの死体に、近づいたルーカスは、みどりの口元から香る匂いに、眉を寄せた。

アーモンド臭だ。

ルーカスの隣に来たジュディーは、手帖に事細かに気が付いた事を記入していた。

「そうね。あの人の事を恨んでいた人なんて、沢山居過ぎて困るんじゃないの？」

「フーン。アンタもその中に入ってんだろ？ 普通なら、自分の母親が殺されたんなら、泣き喚いているはずだ。そんな澄ました顔で冷静沈着にも程があるぜ。お前、本当に10歳なのか？」

背中越しに、ルーカスの低い声が、リビング中に響いた。

「ルーカス!!」

「すみません。部下が失礼な事を言いまして」

「良いんですよ。警部。だって、彼の言う通りですもの。ですが、私があの人を発見した時には、もう死んでいました。アリバイがあります。今日は、夕方迄 教会で週に一度行われているボランティア活動に参加してましたから。神父様や、今日訪問した孤児院のシスターにお聞きすればよろしいかと・・・」

「JJは、署に電話をすると、殺人事件の線が濃いとだけ伝えた。

「後、2分位で、現場検証のチームも到着する。ルーカス！」

「ハイ」

「お前は、此処に残ってる」

「エ？」

「私は、このお嬢さんと少し話があるからな。ジュディー、一緒に来てくれ」

「はい JJ」

奥の部屋に連れて行かれた美空、JJそしてジュディーは、信じられない物を見る事になった。

第1小節（後書き）

少し訂正しました。

第2小節

リビングのすぐ奥にある部屋に入ると、ジュディーに扉を閉めるように言った。

ボタンと扉が閉まると、「」は美空の冬服の袖を触ると聞いて来た。

「どうして君は、長袖の服を着ているんだい？」

「日光アレルギーがあるからよ。悪い？」

「ほう。しかも、冬服とはね」

「冷房病になりやすいの。何か文句あるの？」

肩を竦めて首を横に振る「」は、真面目な顔をしていた。

「どうして君は、腕のアザを隠すんだい？」

「このアザは、元々出来やすいの。私自身、白血球が人より少し多いんですって。だからよ」

右の袖を捲りあげた美空。確かに其処には、何箇所か青アザが出来ていた。

「ねえ、警部さん。あなた赤ずきんみたいに聞いてくるのね」

首を傾げながらも、呆れた顔で聞いて来た美空は、無表情で「」を見て言った。

赤ずきんみたいにと言つ言葉を聞いて、ぷつと吹き出したジュディを見て、「」は窘めるように、目で諭した。

「これは、病気なのよ。同情なんか、要らないわ」

そう、あの人が患ってしまった病気なのよ。

床の上に視線を落した美空は、長い黒髪を手で、後ろへとやった。

コンコン

軽く扉を叩く音がした。

痺れを切らしたようなルーカスの声が聞こえて来る。

「」！現場検証ちーむが、到着しました。そっちのお嬢さんに門を開けて欲しいんだがー」

美空は、目の前にある」の肩をすり抜けると扉を開けて、リビングを通り、一階のエントランス迄、駆け降りて行く。

その美空の後を追って、ルーカスも階下へ降りて来た。美空は自分の背丈よりも高い位置にあるインターホンのボタンに背伸びをして、左手人差し指の指紋認証をさせる。

その時、ふわりと美空の体が浮かぶ。

驚いた美空が振り返ると、自分の体を抱き抱えているルーカスがいた。

「汗をかいてるなら、着替えて来い。お前の冬服は暑苦しいんだよ。」だつて、あんたの事 もう気付いているのさ。大人しく普通の服を着て来い」

鋭く光る碧眼の瞳が、少女をとらえる。美空は、そのミステリアス

な瞳に身体を強張らせる。
こ、怖い…。捕食者の目だわ。

「ム…ムカツク大人ね。・・・いいわ」

美空は、小さく溜息を着くと、「いい加減、下ろしてくれない？」
そう呟いた。

ゆっくりと美空を床に下ろしたルーカスは、彼女の吸い込まれるよ
うな黒い大きな瞳を見つめた。

「？」

(どうして、何もかもを諦めた目をしているんだ？)

「着替えてくるわ」

一言だけ残して、美空は二階にある自分の部屋へと向かった。リ
ビングを通り、JJたちがいる部屋に入ると、本棚の前に立った。
アルバートアインシュタインの分厚い本を手前に引くと、扉が開い
た。

「隠し部屋！！」

JJが言うと、美空はクスクス笑う。

「別に隠してなんか無いわ。此処は、もともと私の部屋なの。子供
の単なる遊び心よ。」

それを聞いた2人は、隠し部屋から出ると、美空が出て来るのを待
っていた。

自室に入った美空は、カーテン閉めると、冬服の黒いセーラード

レスに分厚いタイツを脱いだ。
クローゼットの中に掛けられている服を探すと、一着の服を手に取って、シャワーを浴びた。

隠し部屋から出て来た美空は、
夏用の花柄模様のワンピースに黒い長袖のカーディガンを羽織っていた。

ワンピースの下には、レギンスを履いて来ている。

「お嬢ちゃん、ルーカスに何か言われてないわ!」

JJの言葉を遮るように、言った美空は、苛立ったように眉を顰めると、JJ達の前に現れた。

(やっぱり、長袖の服を着るのか・・・)

リビングでは、現場検証が行われている。

死体を担架に乗せて、運んで行く時、みどりの右手が担架からずり落ちた。拳を作ったままだった。不振に思ったルーカスは、鑑識と何か話していた。

美空は、その様子を一瞥すると、JJに背中を推される様に家を出た。

4人は、車の中では、一言も話さなかった。ただ、スモークが貼られた窓から見える景色が、流れて行く。

警察署に連れられた美空は、ルーカスに「事情聴取をするから」と言われ、取り調べ室へと連れて行かれた。

MJに促されるように、向かい側のパイプ椅子に座った美空は、ルーカスを睨むと鼻で笑った。彼女が部屋を出て行ったのを確認した

ルーカスは、頬杖をつくど、ギラギラした碧眼で、美空を見ていた。

「フッフ…あなたも、私がやったんだと思っているんでしょ？」

普通なら、どんな悪党でも自分の罪を吐いてしまっ程、感じるルーカスから放たれる威圧感と重圧感は、美空には効かなかったようだ。美空は、無表情でルーカスに対して、睨けて来るような言い方をしてきた。

「じゃあ、どうして母親が死んだのに、泣かない？」

「それを調べるのが、あなた達警察の仕事でしょ」

美空の前で煙草を吸おうとすると、美空がフツと

「吸わないのに、格好付るのなら、やめれば？」

ルーカスの煙草を持つ手が震えていた。

「何故、そんな事を知っている？」

美空は面白く無さそうに、視線を逸すと、「一人にさせてよ」と呟いた。

がたんとパイプ椅子を倒して、部屋の外に出たルーカスは、隣の部屋へと入って行った。

其処には、署長のMJとJJそしてジユディーが窓から見える美空の様子を見ていた。

「本当に10歳なの？ あの落ち着き方と言い、ルーカスを黙らさ

せる言葉と言い、只者じゃ無いわね。　ジュディー、彼女の父親に連絡はしたの？」

それを聞いたルーカスは、隣の取り調べ室へ急いで戻った。デスクを挟んで向かい側のパイプ椅子に座ったルーカスは、黙って美空を見ていた。

「ええ！！　勿論です。小田切氏は只今、アメリカに出張中として、恋人のテレジア・オスカーさんが、彼女の身元引き受け人として、署の方に来られるそうです」

MJは美空の身元引き受け人の名前を聞いて、何度も瞬きをした。ルーカスのイヤホンから隣の部屋で話されている事を聞いていた。

「良かったな。お嬢ちゃん、あんたの身元引き受け人が来るそうだ」

「そう。　テレサね」

「何でそう言い切れる？」

「父は、アメリカに出張中よ。知ってるくせに、どうして言わせるの」

綺麗な眉を顰めながら、デスクから顔を上げた美空は、フンとそっぽを向くと、また
30分程経っただろうが、黒塗りの高級車が、警察署の前に停車した。

その車から、すらりと長い脚が出て来た。長い栗色の巻き毛に顔には、大きなサングラスをかけている。

何処からか、既にパパラッチが嗅ぎつけて来たのだろう。カメラの

フラッシュがたかれる。

SP達は、テレジアをパパラッチから守るために、パパラッチ達を押し退けると、テレジアは急いで署内に入ってしまった。

美空はデスクに突っ伏していたが、部屋の外側が急に騒がしくなってきたので、慌てて顔を上げると、取り調べ室にあるたつた一つのドアを見つめていた。

カチャリと言う音と共に、銀色のドアノブがゆっくりと左回りに回ると、ご機嫌なMJと一緒に、部屋に入って来た背の高い美人。

彼女を見た美空は、初めて子供らしい不安気な表情をすると、その美人の淡いグリーンワンピースに縋り付いた。

「ちゃんど、子供らしい表情が出来るんじゃないか」

それを聞いたテレジアは、美空をぎゅっと抱き締めると、ルーカスを睨んだ。

「親を亡くしたら、絶対に泣わめかなきゃいけないんですの!？」

「ルーカス!!!」

MJが窘めると、ルーカスは肩を竦めた。

「へいへい。済みませんでした。これからは、気を付けますよって」

そう言うと、ルーカスは美空の側を通り抜ける時に、鋭い目で少女を睨んだ。

「これからも、また会うんだろっからな。あんたの母親は、教えてくれたぜ。こんなモノ残してな」

振り向きざまに、ルーカスが彼等に見せたのは、現場検証で撮られた1枚の写真だった。

【アメリカ硬貨】

このコインは、被害者が握り締めて居たんだ。

恐らく、彼女はダイニングメッセージとして残したんだろっ。

写真を見せられ、ルーカスの説明を聞いた、美空とテレジアは、驚括すると、お互いを抱き締めあった。

「このアメリカ硬貨は、アメリカで最も多く使われる硬貨ですよ。ね。テレジアさん？ あなた今日の昼二時頃、何所で何をして居たんですか？」

ニヤリと微笑んだルーカスはテレジアを見据えた。

テレジアは、口の端を少し上げると、スツと航空チケットの半券とパスポートを出した。

「残念だけど、私は40分前に彰人がいるNYから、巴里に帰って来たばかりよ。何なら、入管にでも聞けば良いわ」

パスポートの日付と航空チケットを確認すると、ルーカスは美空を見て、ニヤリと笑った。

「お嬢さん。俺は、子供でもあんな殺人くらい出来るのは、知っているぜ。俺は絶対にお嬢さんの尻尾を捕まえて見せるぜ」

「ルーカス！！」

そう言い残すと、ルーカスはゆっくりと部屋を出て行った。

MJは、2人に書類上の手続きをして下さいと言つと、デスクの上に数枚の用紙が置かれた。

美空の身元引き受け人の用紙に、テレジアが自分の名前をサインで数力所書き込むと、手続きは終わった。

美空は震える声で、テレジアに聞いて来た。

「私が泣かないから・・・喚かないから、あの刑事に疑われてるの？」

美空のか細い声を聞いたテレジアは、膝を屈めると頭を振った。

「私のアリバイが無いから・・・」

美空の絞り出す様な声を聞いたテレジアは、美空を抱き締めると、美空の両手を持って言った。

「美空。私は知っているわよ。あなたが 人殺をする子じゃ無いってね。だから、安心して」

2人の様子を隣の部屋から見ていたルーカスは、感情の無い美空の表情と少しだけ見えた、美空の腕にあるアザに、注目した。

2人が、取り調べ室から出ようとしていると、ルーカスが慌てて二人がいる取り調べ室へと入って来た。

テレジアが何か言う前に、美空の黒い長袖のカーディガンを脱がせた。

美空の肌は、黄色人種特有の肌と言うよりも、白人に近く象牙色だった。

美空の細い腕には、クッキリと残されて居た赤黒いアザが、無数にあった。

アザは、丸い物ではなく、細長い物で、強く叩かれた痕だ。

それを見たテレジアは、灰色がかった青い瞳を見開くと、両手で口を塞いだ。テレジアの目から、幾筋もの涙が頬を伝って流れて行く。と、光る雫が灰色のコンクリートの上に落ちて、丸いシミを何個も作った。

「み、美空ちゃん！！ どうして私や彰人に・・・」言える訳無いだろ」

テレジアの言葉を遮るように、言って来たルーカスは、さらに続けた。

「お嬢さん。あんたが『今日、孤児院を訪問して居た』と証言していた孤児院だが、市内にある全ての孤児院に、シラミ潰しで問い合わせた結果、面白い事が分かったよ」

ビクンと美空の肩が、ほんの僅かだけだが、動いたのをルーカスは、見逃さなかった。

「どうしたんだい？ 勝気で生意気なお嬢ちゃんは、何処に行った

んだ？ 孤児院だが、今日は誰も来てないと言っていたよ。これでお嬢さんにアリバイはない訳だ。動機も十分過ぎる程有るしな。どうする？ 得意の大人顔負けの無表情になるか？」

「わ・・・私が殺したとでも言うの？」

美空がルーカスの顔を下から見上げるようにして、睨みながら言うて来ると、ルーカスは微笑んでいたが、目だけは笑っていなかった。

（お嬢ちゃん。あんたの化けの皮を剥がしてやるぜ）

ルーカスの目は、そう言っていた。

「お嬢ちゃん。あんたには、母親のみどりを殺す理由が、十分過ぎる位に有るからね。悪いが、此処からはすぐには出れないよ」

そう言うと、ルーカスは美空を見下ろした。

「そう。仮に犯人が私だとしても、証拠はあるの？ 自白だけに頼ってはいけない事くらい、10歳の子供だって知っているわ。それに、あなたがその足で孤児院に訪問した事なんて、あるのかしら？

孤児院は施設だけじゃ無いのよ」

そう言うと、美空はテレジアの手を引っ張ると「行きましょう」と一言だけ残して、取り調べ室から出て行った。

廊下では、「J」が手に持っていたストールを美空の肩にかけると、アザが見えないようにカフスを使って留めてくれた。

「ありがとうございます。警部さん」

「部下の非礼を許してくれ・・・」

「あの方は、『目に見える物だけしか、見えない方のようですね』あのダイニングメツセージを他の意味で考えてみては、どうですか？」

「それは、どういう事です？」

「それを調べるのが、あなた達警察の仕事でしょ」

そう言い残すと、2人は美空が住んで居たアパルトマンへと帰って行った。

「おい。どう思う？ ルーカス？」

ルーカスは、顎を親指と人差し指で挟むと、考え込んだ。

「さあな。でも、あのお嬢ちゃんは、知ってるみたいだぜ」

「そうだな」

「」は、煙草を啜えると、ダンヒルのライターを探した。

「暫く泳がせてみるか」

第2小節（後書き）

誰が犯人なのかを考えて下さい。

第3小節

テレジアから、一緒に彰人がいるアメリカへ行こうと言われたが、美空は首を縦には振らなかった。

「テレサママ……今の私は、今回の殺人事件の重要参考人なのよ。もしも私が国外に出たら、警察に私が犯人だと言っている様なモノだわ。だから、パパが此処パリに帰って来るまで、待つことにする」

「美空……。あなたもしかして、犯人を知っているの？」

テレサに聞かれて美空は、テレサの細いくびれに抱きつくと、か細い声で言った。

「まだ、想像の段階よ。だけど、証拠がないの。それに……。うん。もういいの」

美空の大きな瞳に、涙を浮かべると一筋の光が頬を伝って流れる。感情なんて言う余計な物は、当の昔に捨てた。

テレサは、次の日になると、後ろ髪を引かれる様に、美空を見ながらも、彰人がいるアメリカへと旅立った。

今回は、断れない仕事が入っていたから、仕方なく美空を巴里に残して行った。

テレサが、アメリカに旅立つ二日前に一本の電話がJJの所に、かかって来た。それは、美空の身元引き受け人であるテレサからの電話だった。

「もしもし。警部さん。私、美空の身元引き受け人のテレジア・オスカーです。明後日から、私は、アメリカへ行きます。本来ならば、美空を連れて行こうと思いましたが、本人が、『私は、この事件の重要参考人なのよ。フランスから出れば、私が犯人だと言っている様なモノだわ』そう言っていたの」

それを聞いたJJは、美空の考えが正しい事をテレジアに伝えた。テレジアに美空のベビーシッターを兼ねて、彼女の世話をしたいと頼まれたJJ。

それで、今 美空は、JJが運転する車に乗っている。

「・・・で、あなたが私のベビーシッターなわけ？」

JJは、苦笑いをする。ハンドルを握ったままで、前を向いていた。

「そう。君の事をテレジアに頼まれたのさ」

軽いため息をついた美空は、車窓から流れるビル街を見ている。

「あなただって、疑っているんでしょ？ でなきゃ、こんな可愛げ無い子供の世話なんてしたくはないでしょうから」

「お嬢ちゃん。本当に可愛げ無い子供は、そんな事は言わないよ。それに、君は10歳だ。保護者がいない場合は、ベビーシッターをつけるのが常識だろ？」

「・・・そうね。でも、警部さん。あなたにも家庭があるでしょ？ だったら、お邪魔になるし、それならいっその事、あの憎たらし刑事の所に行くわよ。そうすれば、私の疑いも晴れやすいもの」

いきなりの強気で、物申して来た美空をみたJJは、笑い出した。

「君って、面白い子だね。」

「そうかしら？電話に私が出るといつも高校生に間違われるわ。」

それを聞いたJJは、ぷつと吹き出した。

警察署の駐車場に着いたJJは先に車から降りると、美空の方のドアを開けて、美空の手を取った。

「警部さん。ロリコンだと言われるわよ。」

「言わせておけば良いのさ。下手に弁解する方が、怪しいからね。それに俺にも君と同じ年の娘がいるんだよ。」

「そう。まあ、お姫様抱っこされるよりも、マシだね。」

「おや？そうかい？俺はてつきり女の子全般にお姫様抱っこされる事が、夢なんだと思っていたけどな……。」

「それは、人によりけりじゃないの？私は、お断りよ。」

署内に入ると、刑事や警官達の視線が自分に注がれるのを知ると、美空は無表情で周りを見ながら、JJにカフェオレをもらうとポツリと言った。

「そんなに10歳の小娘が、珍しいのかしら？それとも、余程暇だとか？」

美空の一言で、場の空気が一瞬止まった。
他の署員から見れば、有名人の娘を連れて来た警部に対する視線は、羨ましいと言う感情とやつかみも入っていた。

「オイオイ 俺の立場も考えろよ」

困った顔で、美空に話しかけてくる「J」。
そんな「J」を署内のみんなは、同情と哀れみの目で見ていた。

殺人課の室内に入った美空が、ポツリと呟いた。

「ああでも言わなきゃ、あの人達から根掘り葉掘り言いたくないことまで、言わされるのよ。嫌でしょ？」

それを聞いた「J」は、持っていたコーヒークップを落としそうになった。

まさか、10歳の子供に大人の職業事情まで、心配されていたとはな……。参ったな。頭を掻きむしると、小さく溜息をついた。

「君って、子は……」

「ボンジュール！ って「J」！ 何で、このクソガキを連れてるんですか?!」

このクソガキと言われて、美空がにつこりとルーカスに微笑むと、美空は思いつきりルーカスの脛を蹴った。

「イテエ！ 何すんだよ！ このクソガキ!!」

「私ね。子供扱いされるのが1番嫌いなよね。特に、ガキにクソが付くのは、許せないわ」

足を痛そうにさすっているルーカスは、美空を睨んだ。

「今のは、ルーカスが悪いわね。彼女に謝りなさい」

背後から、笑混じりの声が聞こえた。

「MJ!」

にっこり微笑む褐色の美女は、少し屈むと美空の頭を撫でようと、手を美空の頭の上に置こうとすると、スッと美空はMJの手を避けた。

美空の瞳が、MJを睨むと、MJはくすりと笑うと署長室へと消えた。

「ーーーークセに」

美空は、英語で何かを言っていたが、あまりにも早口過ぎて、誰も彼女が言っていた言葉の意味を知る由もなかった。

その時、室内に電話の音が鳴り響いた。その電話を取ったのは、ジュディーだった。

「もしもし？ え？ 殺人事件？」

ジュディーの言葉を聞いた殺人課の人間達は、椅子から立ち上がり、皆一斉にジュディーの顔を見た。

室内の空気が、ガラツと変わった。

MJが、荒々しくドアを開けると、「場所は？被害者は誰なの？」
矢継ぎ早にジユディーに聞いて来た。

ジユディーは、美空の顔をチラリと見ると、被害者の名を言った。

「被害者の名は、ち、チエース」 モールドルフ 40歳 場所は、
テムズ川近郊の公園で発見されているわ」

「フン。天罰よ」

呟く美空の肩を掴んだルーカスは、怒りを露わにした。

「子供でも言っていていいことと、悪いことがあるんだぞ！」

頭に血が登ったルーカスに、美空の小さな手が音を立てて、彼の頬
を軽く叩いた。

叩かれたルーカスの頬は、少し赤くなっていた。

周りは、ざわついていた。

「あなたは本当の事を知ろうとしない！ あの男が…」

美空が自分の両肩を抱き締めると、JJの腕の中で体を震わせて泣
いていた。いつもの勝気で生意気な少女は何処へ行ったのやら…。
でも、何でこんなに震えて泣いているんだ？

「襲われたんだろっ」

JJの言葉に、美空の肩がビクンと大きく震えると、また小刻みに
彼女の体が震えていた。JJは、優しく美空に、お嬢ちゃんを傷つ
ける様な者は、居ないよ」そう言うと、ホットチョコレートをジユ

デイーから受け取ると、美空にホットチョコレートが入ったカップを手渡した。

「え？」

俺は、JJの言葉に絶句した。確かに、最初からこの子は、俺に對しても他の署員達に對しても、トゲトゲしかった。

だけど、JJには、こいつは初めからJJにだけは、俺たちと違う態度を取っていた。

目を真っ赤にして、泣き腫らした美空は、手渡されたカップに口をつける、ゆっくりと飲み出した。

襲われた？ だって、あの男は40だぞ。

彼女は、10歳だぞ。

俺は、美空を凝視していた。第二の事件もこの子を巻き込んでいる。一体この子は何を隠しているんだ？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5004x/>

疑惑の旋律

2011年10月28日07時09分発行